

note記事の事実誤認について

2023年5月31日 大下真記子

バーニングマン日本窓口あての公開質問状のほか、FlowerCrown名義でアップロードされたnote記事に含まれる事実誤認について、主なものを個人情報に配慮した上で指摘させていただきます。

Twitterで断片的に知り得た情報から類推する以上、背景事情が欠けたままで憶測が独り歩きするのは仕方ないと思います。ただ、このような憶測に基づいて質問等を構成するとお返事のしようがなくなってしまう。ご自身の身におこった真実を伝える記事が憶測に基づいた断定で構成されているのは本来の意図を失うと思うので、こちらの追加情報を確認した上での訂正をお願いします。

<https://note.com/flowercrown>

1. バーニングジャパンで2年間性的暴力の訴えを放置されたとされる件

参照:バーニングマン日本窓口宛てて暴力事件調査依頼をするための準備をしていきます

バーニングマン日本窓口宛 暴力事件調査依頼の準備【はじめに】

バーニングマン日本窓口宛 暴力事件調査依頼の準備【バーニングジャパン2022開催によせて
～暴力被害者から～】ほか

「2015年のバーニングジャパンでセクハラにあった事をメールで伝えたが2年間返事がない」というAさん(仮)のTwitterの投稿に対しては当時、即座に状況把握を行いました。運営関連の受信メールの中に見つからなかったため、TwitterのDMで確認したところ匿名送信のフィードバックフォームだったかもしれないと伺い、調べましたがフォームにも同内容は届いていませんでした。誰かの意図的な隠蔽ではなく、メールかフォームの送受信ミスで届いてなかったと分かったため、DMで2015年時に送信したかった内容を送ってもらいました。

セクハラの内容を知った上でDMでコミュニケーションを続け、最初の投稿から1週間以内に会ってお話しをする機会をもらいました。対応が遅れた事の謝罪のほか詳細について伺い、セクハラはバーニングマンやバーニングジャパンの自由な表現の一形態として容認できるものではない事、刑事事件として立件するならお手伝いする事を伝えました。Aさんは刑事事件や相手への処分は望まない事、それよりセクハラの一時的なストップ報告先の設定やコンセンルの啓蒙など今後のバーニングジャパン開催時に役立つ提案をしたいといった話をされました。

そもそものセクハラと関係のない点まで炎上しつつあったのでTwitter上での対応も協議しましたが、Aさんのタイムラインは自身で対応したいとの事だったので、表立っての介入はしなかったと思います。投稿後の対応のほとんどがDMと対面で行われたので、表向きのやりとりだけ見ていた方には放置したように見えたかもしれませんが、相談の上の事でした。Aさんが声をあげてくれて初めて対応できた件でしたが、知り得た以上は性的暴力は放置しませんし、二次被害を煽る事もしません。

Aさんはその後もバーニングマン、バーニングジャパンともに参加しています。

2. 問題行動のあった親子が排除されたとされる件

参照:円滑な事件処理のための公開質問①～⑤

ことば:「二次被害」について(1)～(3)ほか

Twitterでは問題行動の内容が書かれていませんでしたが、Bさん(保護者)が「Meetup」に参加した後、深夜に当時小学生だったお子さんを置いて六本木に飲みに行ってしまった件です。まず、公開質問状の中でコメント引用された登場人物と前提となる情報を整理して共有します。

- 「Meetup」はバーニングマン日本窓口が主催する、月に1回程度のバーニングマン好きが集まるための会です。主催者はコメント引用されている大下で、共同企画者として古木さんにサポートいただいています。バーニングマン参加経験あるなしに関係なく、10-25人程度が集まる気軽な集まりなので、バーニングジャパンの参加者も含まれます。
- 引用されていた古木さんはMeetupの共同企画者です。バーニングマンやバーニングジャパンに参加した事があります。バーニングジャパンの運営には関わっていません。
- 引用されていた稲葉さんは、主に都内で開催されているMeetupに参加した事はありません。バーニングジャパンやバーニングマンに参加した事があります。バーニングジャパンの運営には関わっていません。

Bさんは他の参加者の説得にも応じず、大丈夫だからと会場のアトリエにお子さんを置き去りにしたので、遠方の自宅に送り届ける事もできず、企画者の一人でもある古木さんが会場に寝泊まりして翌朝迎えに来るまで見守りました。

会場を貸していただいたアトリエのオーナーさんが、Bさんのアトリエへの出入りを禁止する旨を古木さんが当人に伝えたというのが、Twitterで垣間見えた経緯です。「情にほだされないように」というオーナーさんの言葉は、子供が可哀想だからと今後も面倒を見続けていたら、保護者が監護責任をまっとうしなくなるという危惧からです。

- 問題行動があったのは保護者のBさんで、被害を受ける可能性があったのは置き去りにされたお子さんと何か事故があった際に責任を問われてしまう古木さんとオーナーさんです。
- Bさんが出入り禁止になったのは、会場としてレンタルしたアトリエです。
- 稲葉さんの差別的な発言は、この件についての対応を終えた後に発せられたもので、決定内容と全く関係ありません。また、擁護できるものでもありません。
- オーナーさんの決定については、Meetup主催者の大下および共同企画者の古木さんが同意し、古木さんが当人へ伝えました。

なるべく誰もが参加できるように合理的配慮を行うのはRadical Inclusionというより基本的人権の範疇だと考えますが、他のイベント参加者の安全が確保できない場合は参加をお断りする事もあります。それをかりそめの包摂だと批判する事も出来ませんが、イベント開催時はどこかで線引きが必要になる場面があります。この場合は、未成年の安全は保護者の参加より優先すると主催側で判断しました。

Meetupには様々な障害を持った参加者がいます。身体障害や知的障害といった目に見える障害があれば、長いつきあいになってから分かる障害もあります。どんな人でも同じように受け入れ、障害のあるなしで選別する事はありません。Bさんが出入り禁止を伝えられたのは、責任を持ってお子さんを連れ帰らないからでした。それは懲罰ではなく、アトリエを安全に運営するうえでオーナーさんが定めたルールには従う他ないからです。

その後、お子さんが成長したBさんは一人でバーニングジャパンに来ています。

※上記2件が最も繰り返し例示されている事例だと思います。何度も説明される中で、類推が確定情報として記述され、それに基づいて議論や質問が形成されています。例示したページ以外にも記述が点在するのでご確認ください。※